

ラピタ文化複合の解体過程

——特に土器の器形・装飾技法における編年的検討に基づいて——

石 村 智

【要約】 本論はラピタ文化複合の展開について編年的考察を加えることを目的とする。特に、ラピタ文化複合の拡散と解体のプロセスを明らかにするためには編年的検討が不可欠であることを指摘する。1章ではラピタ土器の編年における先行研究を概観し、その問題点を指摘し、改めて型式学の適用の有効性を指摘する。2章、3章では、これまで検討が不十分であった土器の器形・装飾技法についての編年的検討をおこなう。最後の4章では、先行して筆者がおこなった土器文様の分析結果と、器形・装飾技法の分析結果を総合し、ラピタ土器の変化について総合的な編年的考察をおこなう。その結果、ラピタ文化複合は拡散の途上から既に解体に向かう構造を内包していることを明らかにした。

史林 八七巻三号 二〇〇四年五月

一 は じ め に

謎の海洋民族・ラピタ人の科学的な研究が始まって半世紀という月日が経った。いうまでもなく、ラピタ人とは人類史上初めて南太平洋の海洋世界（リモート・オセアニア^①）に進出した人々である。しかし、実際に「ラピタ」と名乗る民族がかつてこの地球上に存在した訳ではない。それは、偶然「ラピタ」と名付けられた土器を持っていた人々に付けられた、学問的な名称なのである。^②つまり、ラピタ人とは当初から考古学的な現象から認識された民族であったのだ。

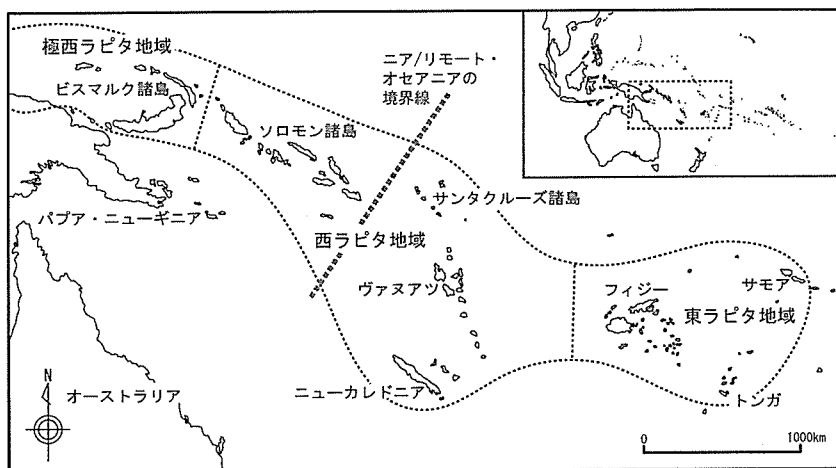


図1 ラピタ文化複合の分布範囲と地理区分

しかし現在では、ラピタ人は単に土器の存在だけで示されるものではない。考古学のみならず、形質人類学・言語学・比較民族学の進展により、ラピタ人の実体がおおよそのところまで判明してきた。それによると、彼らはオーストロネシア語族に属するモンゴロイドであり、アウトリガー・カヌーを駆使した高度な航海技術を有し、タロイモ・ヤムイモなどの作物を栽培し、ブタ・イヌ・ニワトリといった家畜を飼育していたことが推定される。また言語学の語彙復元の成果により、世襲制の酋長がいる階層化社会であったことが推定されている。さらに、理化学的分析のデータから、黒曜石や土器、石斧などが島嶼間で長距離交易に供されていたことも判明している。③ 彼らは3300-3200 BP頃にビスマルク諸島に突如として出現し、数百年の間に西ポリネシアのサモアまで一気に拡散する。しかし2700-2600 BP頃にはその姿を消してしまう。

突如として現れ、また突如として姿を消す。これはまさに謎の民族と呼ぶにあさわしいではないか。しかし、実際にはラピタ人は決してどこかに行ってしまったのではない。あくまで文化的な同一性が消滅し、端的にはラピタ土器が消滅することによってその手がかりを消してしまうのである。従って、その後ラピタ人はそれぞれ定着した各地で独自の発展を遂げていくことになると考えられている。すなわち、

ラピタ人こそメラネシア・ポリネシア両地域の住人の祖先と考えられるのだ。

しかし依然として残る謎は、なぜかくも急激に消滅したのか、そしてまた、なぜサモアまで到達した段階で拡散は停止しなければならなかったのか、ということである。こうした謎を解くにはまず、こうした急激な変化は、何か突発的な出来事によるものなのか、それともそれに至るプロセスがあるのかを見極めることが重要である。④⑤そのためには、いうまでもなく、ラピタ文化複合の展開過程をトレースすることができる編年の確立が不可欠である。

しかし、物質文化などの考古学データから編年を検討していこうという作業はこれまで低調であったと云わざるを得ない。その理由は、ひとつには放射性炭素年代への偏重、もうひとつには仮説演繹型の研究スタイルにある。⑤放射性炭素年代は確かにデジタルな年代を提示してくれるが、統計誤差の問題から、必ずしもアセンブリッジ間の前後関係を明示してくれない。特に五十年・百年という短いスパンで編年的な議論をするのは困難である。また後者については、しばしば言語学や比較民族学を援用して復元すべき社会を想定し、考古学データを評価する「参照枠」としている (eg. Kirch and Green 2000)。しかしそれは必ずしも考古学データと整合的とはいえない (Smith 2002)。むしろ、考古学データの複雑性をより多く説明しうる理論の構築こそが重要である。

そこで筆者は前稿 (Ishimura 2002) において、土器の文様の変化に基づいてラピタ文化複合の編年をおこなった。しかし、これは層位や放射性炭素年代の結果とも整合性を示しているとはいえず、土器のひとつの要素にのみ基づいた結論といわざるをえない。そこで前稿をうけて本稿では、土器の他の要素、特にこれまで注目を受けることが少なかった器形と施文技法について編年的な検討をおこなうこととする。もしこれらの要素についても、前に検討した文様と同様な変化を示すことが確認できれば、筆者の提示する編年の妥当性を補強するものとなるだろう。そしてさらには、こうした変化の持つ意味を考察することによって、ラピタ文化複合の拡散の停止と消滅の理由を説明するモデルを提示することも出来よう。

以下、本論は四章からなっており、まず1章ではこれまでのラピタ土器の編年についての批判的検討をおこなった上で、

筆者の編年案を提示する。これをうけて続く2・3章では、ラピタ土器の器形および施文技法についてそれぞれ編年的検討をおこなう。そして最後の4章では、前稿で示した文様の分析結果と、本稿で示す器形・施文技法の分析結果を総合した上で、ラピタ文化複合の拡散と解体のプロセスを考察してみたい。

① ニア／リモート・オセアニアの区分はR. Green (1991a) によって提起された。ニア・オセアニアはソロモン諸島までの、更新世までに人類が進出していた地域である。リモート・オセアニアはソロモン諸島以東の、更新世以降に人類（ラピタ人）が進出して成功した地域である。前者の地域は、隣同士の島が互いに視認できるほど近い距離にあり、そのため比較的簡単な船で渡ることができるが、後者の地域は、視認できないほど互いに隔たっており、そのため高度な航海技術と計画的な（漂流などによらない）植民活動によって進出可能となるのだ。

② ラピタの名は宮崎駿の映画『天空の城ラピュタ』やスウィフトの『ガリバー旅行記』とは本来何の関係もない。ニュウカレドニアで発掘されたSite 13 遺跡 (Gifford and Shuler 1956) の現地名に由来するのだが、近年C. Sand (1997) によって、現実にはこうした地名は実在せず、聞き違いによるものであることが明らかにされた。

③ ラピタに「文化複合 (cultural complex)」というやや耳慣れない言葉を冠する理由はここにある。つまり、複数の文化要素の組み合わせによる一体性を強調するためにGreen (1968) によって導入されたのであるが、これは一方では、ラピタ土器の広がりには単にそれが交易品として流通した状況を示すに過ぎないのではないかという批判 (Clark and Terrell 1978) に答えるためでもあった。

④ M. Spriggs (1992) はラピタ文化複合の消滅について五つの仮説を

提示している。A 交易システムの縮小、B 地域的適応、C 社会・政治的変化、D (在地集団への) 吸収、E 二次的植民、の五つである。もちろんこれらのうちには相互補完するものもあるし、特定の地域にしか当てはまらないもの（例えばDとEはメラネシアにのみ）もある。しかしこれらはいずれも演繹的に想定した仮説であり、Spriggs 自身もこれらの検討の末に述べていることだが、具体的なデータに基づいた新しいモデルを構築していくことが重要である。本論の意図もここにある。

⑤ 筆者はここで仮説演繹法の有効性を否定する意図はない。ただし、仮説演繹法が科学的発見をもたらす方法としては有効ではないと考えている。もちろん今更、単にデータを蓄積することによって理論が構築されるなどという帰納法を担ぎ出すつもりは毛頭ない。実際の科学的発見は、データの複雑性・多様性に対し如何に整合的な説明が可能かモデルを提出できるかという、一種の謎解きゲームのような状況から起こることを科学史家が明らかにしている（ハンソン一九八六、クーン一九八七）。その意味で、現状のオセアニア考古学においてデータの蓄積と共有は最重要課題である。実際、一部の発掘・分析データは一部の者にしか目に触れることのできない形（個人の学位論文や、行政府や博物館に提出されるレポートなど）で存在しアクセス困難な状況にあるのは、研究上の大きな障害となっている。

1 ラピタ土器の文様とその編年的研究

文様のスタイルの認定

ラピタ文様の本格的な研究はいわゆるミード・システム (Mead 1975 [1973]) を端緒とする。ラピタ文様を単位文様 (モチーフ) の反復によって構成されているとみなし、フィジーのラピタ土器を素材に全部で三三種類のモチーフを認定した。この分析方法は言語学の統語法 (シンタックス) の手法を参考に考案されたものである。モチーフの種類はその後のサンタクルーズ諸島出土土器の分析を通じて一〇〇にまで増加した (Donovan 1973a, b)。

この手法の利点は、たとえ土器が破片として出土して文様の全体が復元できなくても、モチーフ単位で遺跡間比較が可能になる点である。ラピタ土器はしばしば細片で出土するため、研究初期ではこの方法は非常に有用であった。McGreen (1978) は各地の遺跡のモチーフ組成を相関分析にかけ、遺跡間の関係性を調べた。その結果、ビスマルク諸島からフィジーを除くメラネシア島嶼部までの地域には曲線を多用する複雑な文様モチーフが多く分布するのに対し、フィジー・トンガ・サモアには幾何学的で単純なものが分布することが指摘された。そこで前者を西ラピタ・スタイル、後者を東ラピタ・スタイルとして区分した。しかし当時の放射性炭素年代は、いずれの地域も 3000 BP 頃に遡る値を示しており、これはアジア方面から侵入してきたラピタ人の急激な拡散を示すものと考えられていた (「ポリネシア行き急行」仮説、ベルウッド一九八九)。そのためスタイルの差は年代を示すものではなく、地域差を示すものと理解された。

ミード・システムを徹底化したのが D. Anson (1983) で、従来のモチーフの細分化をなし五〇〇種類以上のモチーフを認定した (アンソン・システム)。遺跡間比較には多変量解析 (クラスター分析) を適用した。その結果、ビスマルク諸島には、Green (1978) が西ラピタ・スタイルと認定したメラネシア島嶼部に近接する遺跡 (Watom 遺跡) と、東・西ラピ

タ・スタイルとは異なるクラスターを形成する遺跡 (Elouae・Ambile・Talasea 遺跡) が存在することが指摘された。そして後者は西ラピタよりも複雑な文様を示し、またビスマルク諸島がラピタの分布範囲でも最古の地域と目されることから、このまとまりを極西ラピタ・スタイルと認定した。そしてこれを西ラピタ・スタイル (Watoni 遺跡を含む) に時間的に先行するものと解釈した。これはビスマルク諸島におけるラピタ人の「自生説」 (Allen and White 1989) を支持するものと目された。しかし極西ラピタの諸遺跡も 3500 BP より古く遡る年代を示さず (Kirch and Hunt 1988) 、その後の「ラピタ・ホームランド・プロジェクト」 (Allen and Gosden 1991) においてもビスマルク諸島におけるラピタ文化複合の「自生」の証拠を見出せなかったことから、この説は急激に支持を失った。極西ラピタ・スタイルについても、解析学的な問題によって生じたという批判がなされた (Kirch et al. 1987) ①。

しかし近年の年代の再検討 (Spriggs 1990a, 1996) により、当初示されていた 3500 BP 周辺の年代は悉く棄却された (chronometric hygiene) 。その結果、ビスマルク諸島では 3300-3200 BP (Specht and Gosden 1997) 、サンタクルーズ諸島では 3100 BP 頃 (Green 1991b) 、ニューカレドニアでは 3000BP 頃 (Sand 1997a) 、フィジーでは 2900 BP 頃 (Anderson and Clark 1999) 、トンガでは 2900-2800 BP (Burley et al. 2001) と、この年代が妥当とされ、西高東低の年代勾配が確認されるようになった (鈍行列車「仮説」) 。それを受けた G. Summerhayes (2000) はこれらの地域のスタイル差は時間差であると主張し、極西・西・東ラピタをそれぞれ前期・中期・後期ラピタと呼びかえることを提唱した。彼はアンソン・システムを踏襲して同様にクラスター分析を実施し、ビスマルク諸島の中でも極西ラピタ・スタイルのクラスターを形成するもの、西ラピタ・スタイルに近接するもの、さらに東ラピタ・スタイルに近接するものがあることを指摘した。さらに最後のクラスターについて、東ラピタ・スタイルと共有するモチーフが存在することから、ビスマルク諸島から東ラピタ地域に至るまでの範囲には直接的な交流の存在があったものと解釈した。

これまでの方法論の問題点

このように現在ではラピタ文化複合はおおよそ三期に分けることができることが示された。しかし、そこで用いられた文様の分析方法には大きな問題点があることを指摘せざるを得ない。そのため、そこから導出された結果もいったん保留せねばならない。

まずミード・システムとアンソン・システムの間には根本的な差異が横たわっている。既に指摘されているのは細分単位 (allotom) の問題である。ミード・システムでは、類似する文様群をひとつの分類単位 (モチーフ) と認定し、そのバリエーションを細分単位として認定している。しかし、何を独立したモチーフとし、何を細分単位と認めるかは恣意的である (Anson 1983) はこれを批判する。そこでアンソン・システムでは、すべての基本的モチーフと細分単位を独立した分類単位 (モチーフ) として認定し、そのためモチーフの数は五〇〇余まで増加することになった。しかしこの分類法の欠点は、モチーフ間、バリエーション間の類似性が考慮の埒外におかれてしまうことである (Green 1990: 41)。

この問題は多変量解析をおこなう際に決定的なバイアスを及ぼす。文様間の類似性を強調することになるミード・システムでは、バリエーションの差異が評価されず、地域的変異をマスキングして地域間の共通性を強調することとなる。一方、アンソン・システムでは文様のバリエーションが強調されすぎ、地域的変異が共通性より強調されることとなる。そのため、ほぼ同じデータを用いても、ミード・システムは地域間の共通性、アンソン・システムは地域間の差異を強調する結果を出力することとなる。こうしたとき、多変量解析が示す結果が実際には地域差を示すのか時間差を示すのかがまったく不明となる。つまり、遺跡間の差異が時間的・距離的な要因にそれぞれの程度負荷されているか特定できない限り、編年の道具としては利用できない。しかも、最初にデータを設定する段階で既に結果が規定されることを考えると、はたしてこれが分析法として理論的に有効なのかという疑問を表明せざるを得ない。^②

さらにモチーフ分類の限界性についても言及しよう。前述の通り Summerhayes (2000) はビスマルク諸島の後期の遺跡に東ラピタ地域と同一のモチーフが存在することを根拠に、両者の間に直接的な交流を想定した。しかし、文様が同一ということは「相同」なのかそれとも「相似」なのだろうか。この場合、同一とされたモチーフらは非常に単純な幾何学文様であった。このような文様は、直接の系譜関係や伝播を想定せずとも偶然に出現しうる可能性が高い。つまり、「相同」ではなく「相似」と考える方が妥当である。そのため、両地域の直接的な交流の根拠にはとうていなり得ないのである (Ishimura 2002: 93; Best 2002: 94)。

結局、実はこれまでのスタイル研究における年代の根拠は放射性炭素年代に依存しており、文様の分析から年代を説明する根拠を提示できなかったのが方法的な欠陥である。

型式学的方法の有効性

こうしたモチーフ研究の行き詰まり (Green 1990; Anson 1990) に対し、M. Spriggs (1990b, 1993) が発表した「人面文」の研究は卓見であった。ラピタ土器には、人面を象った具象的な文様がある。Spriggs はこの文様が徐々に退化して抽象的なものに変化していく様子を、ロジカル・シーケンス (logical sequence) という手法 (Tolstoy 1996) を導入して分析しているが、これは実質的にオスカル・モンテリウス (一九三二) の「型式学」的分析法である。これに並行して、P. Kirch (1997: 132-40) も Talepakeimalai 遺跡出土の人面文土器の分析で同様の方法の適用が可能であることを示唆している。

この分析法の優れた点は、文様全体を構成するモチーフを単体として切り取ってくるのではなく、文様全体の構造およびそれが意味するものを扱える点である。「人面文」自体は、複数のモチーフの組み合わせで構成されているのだが、もしこれを単位文様に分解して分析するのであれば、その全体の文様の意味は分からなくなってしまうだろう。さらに、こ

これらの文様の変化が時間的な変化に対応するならば編年の尺度となりうる点も重要である。モチーフ分析では文様自体の変化の過程を追う試み（Anson 1990）は低調であったが、これはすべてのモチーフが必ずしも型式学的に「鋭敏」とは限らないからだ。

Spiggs の研究は示唆的であったにも関わらず、それに追従した研究はなかなか現れなかった。このことは、型式学および物質文化による編年という研究スタイル自体がオセアニア考古学で低調であったことに起因する（篠遠・荒俣一九九四・四一―二頁、Ishimura 2002: 79-80）。もちろん、Spiggs の分析結果が必ずしも首肯すべきものであった訳ではない。③そこで筆者は「人面文」の型式学的検討を再考し、さらに人面文以外の文様のいくつかについても型式学的変化が追えることを示した（Ishimura 2002）。また筆者の研究と並行して、Beal（2002）も同様な研究を発表している。筆者は前稿で、型式学的方法論の導入の有効性、および編年への適用の可能性を表明した。ここでは三期に区分できることを示したが、今後さらに細分できる見通しもある。④しかしそのためには資料の整備が不可欠である。⑤

こうした型式学的分析法の弱点は、ラピタ土器で文様全体の構成を把握できるほど完形に近い土器がこれまで少なかった点である。しかし、ニューカレドニアでの発見例（Sand 1997b）など、完形で文様全体が把握できるケースが増加しつつある今、これは乗り越えられるべき問題である。また、現在では限られた種類の文様しか型式学的変化を追うことができないが、⑥今後は新たにそうした文様の発見に努める必要がある。さらに、複数の文様系譜の同時性も、同一器面上共伴の事例を多く抽出していくことによって確認していくべきであろう。

三期編年の提示

筆者が示したラピタ文化複合の三期区分の編年をここに掲げておこう（表1）。フェイズ1から3にかけて極西、西、東それぞれのラピタ地域へ順次拡散していく様子が確認される。この結果は Summerhayes（2000）の案とはほぼ同様の結

表1 ラピタ文化複合の三期編年 (after Ishimura 2002)

時期	地域		
	極西ラピタ	西ラピタ	東ラピタ
フェイズ 1	Talepakemalai area B (C3) Adwe (unit A) Talasea Ambitle		
フェイズ 2	Talepakemalai area B (C1) Adwe (unit C) Watom Aitape	Nanggu (SZ-8) Nenumbo (RF-2) Vatcha (Layer IV) Foué Malo	Naigani
フェイズ 3	Apalo Epakapaka	Ngamanie (RF-6) Vatcha (Layer II) Kiki	Yanuca Natunuku Nukuleka Lakeba Mulifanua Sigatoka

果を示す。西から東への年代勾配は放射性炭素年代の傾向とも合致する。

このうち特に重要な変化はフェイズ2から3にかけてである。この段階で文様の退化が著しくなり、人面文などは過度に抽象化され、元の文様の意味が分からなくなってしまうに至る。同時に重要な変化が黒曜石の分布においても見られる(図2)。フェイズ2ではタラセア産を中心としたピスマルク諸島産の黒曜石が広域流通していたのに対し、フェイズ3ではその流通域が大幅に減少し、一方で新たな産地からのものが小規模な流通でそれを補っている様子が確認される。こうした一連の現象について筆者は、長距離交易の減少と、ラピタ人のアイデンティティーの表象としての土器文様の衰退と解釈し、ラピタ人の集団間のコミュニケーションが解体していくプロセスとして評価した。

もしこの編年が妥当であり、こうした解釈を想定するなら、土器文化における文様以外の他の要素についても何らかの変化が生じたことが予想される。そこで続く2章、3章において、土器の器形および装飾技法という側面を採り上げ、その編年的な検討をおこなうこととする。

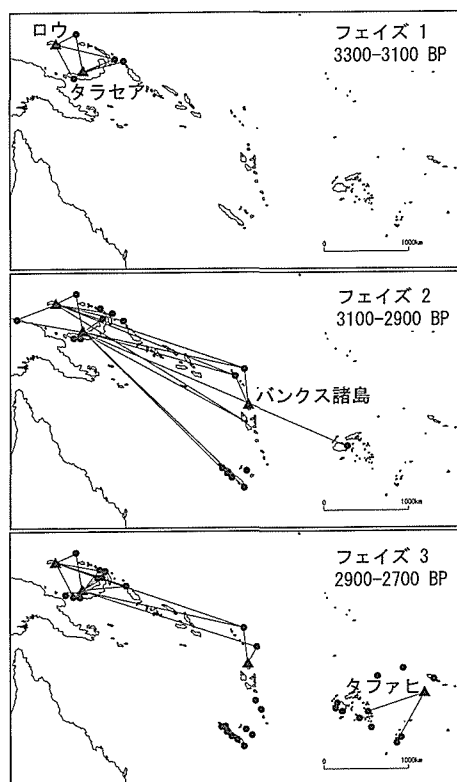


図2 黒曜石流通の時期別変化 (after Ishimura 2002)

① Kirchら (1987) は、多変量解析におけるサンプル・サイズの問題を指摘し批判をおこなっている。つまり Anson が認定した極西ラビタ様式のアセンブリッジのサンプル母数が他地域のものに比べて著しく小さく、そのためこれらが独立したクラスターを形成したのは数の少なさを反映した可能性を指摘したのだ。

② 多変量解析が属性の重み付けに関して客観性を示してくれることを期待する意見はしばしば表明されるが、これは根本的に誤りである。なぜなら分析者が選択した属性それ自体が既に「重み付け」されたものであるからだ。それならば、なるべく多くの（何百もの）属性を選択して恣意性を排せば良いではないかという意見もあるだろうが、それも誤りである。扱う次元（属性）の数が増加すればするほど分析の

正確さは減少するためである（坂野・山田 2001）。

③ 例えば、人面文の最も祖形的なものとして Nenunbo 遺跡出土の double face 文様 (Ishimura 2002 では Type 3) を置いているが、筆者の編年ではこれは一種の変異形であり、彼がこれより後出とする Type 5 に先行することはなく、むしろ並行するか後出的であると位置づけている (ibid.: 82)。

④ Spriggs (2002) も最近の論考で、型式学的方法による編年によって放射性炭素年代よりも精密な編年を構築できる可能性を指摘していたが、筆者も最低五〇年単位で年代が判別できる編年を構築せねば、社会・政治的变化をトレースすることは絶望的であると考えている (Ishimura 2002: 92)。

⑤ 現在、Arnaud Nouy がコンピュータによるラピタ文様のデータベースの構築に取り組んでいるとのことである (Nouy personal communication, 2002)。

⑥ 筆者の分析に対し、人面文など特定の文様だけを採り上げて分析の組上に載せることの論理的な「正当性」がないとの批判が試みられたことがあるが、これは本質的に間違っている。なぜなら考古学は経験科学であり、私たちは所与のデータ（資料）を観察した上でそこで発見した現象について「説明」を加えるのである。つまり、現象を説明

することは、既にその時点でそこに意味があると「重み付け」をおこなっていることと同義であり（観察の理論的負荷性）、その「正当性」はその「説明」が適切であったときに a posteriori に認められるのだ。その意味で、注②に指摘したように多変量解析によって属性の「重み付け」を正当化することはできないし、「重み付け」を廃し、対象を所与のものとして先験的な分類をおこなうことなど認識論的に不可能である（同様の議論は大賀二〇一、一―三頁参照）。

2 ラピタ土器の器形の分析とその編年的考察

これまで土器の器形について編年的な検討が加えられることは少なかった。器形の分類については、Parker (1984) がサンタクルーズ諸島の資料を基にした分類をおこなったが（図3）、あくまで形態学的な比較に留まっており、製作技法などの技術論や、様式論・機能論へのアプローチに希薄であった。

しかし近年では、これまで認識が不十分であった器台（シリンダー・スタンド）や高坏といった器形の存在が注目され始めている (Best 2002)。特に Talepakeimalai 遺跡では、非常に精巧な人面文が施された器台が、海岸に建てられた水上住居の址から、骨製の人形などと共伴して出土していることから (Kirch 1997: 170, 2001: 98)、儀礼的なコンテキストに位置づけて解釈することができる。

そこで本章では、いくつかあるラピタ土器の器形のうち、特に器台・高坏の編年的な消長を分析することにした。そこから、土器様式の変化のプロセス、さらには儀礼のあり方についての手がかりを探っていこう。

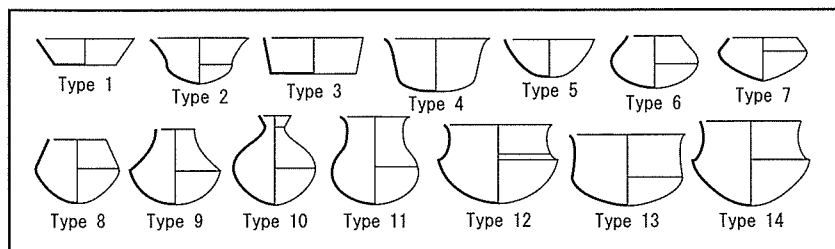


図3 ラピタ土器の器形分類 (after Parker 1984)

器台・高坏の編年的検討

図4に器台・高坏の関連資料を時期別・地域別に集成したものを掲げた。

残念ながらラピタ土器の多くは破片資料であり、完全な器形を示す例に乏しい。これらの器形への認識がこれまで不十分だったのは、こうしたことも一因である。ここでは、器台もしくは高坏として認定しうる基準として、①筒形の形状として復元できるもの、②接地する脚部として認識できるもの、の二つを選択した。これらの基準に加え、他の要素から器形が推定できるものについても資料に加えた。以下、それらについて検討を加えてみよう。

1は前述の Talepakemalai 遺跡出土の器台である。筒形の胴部に二条の凸帯をめぐらせている点が特徴的である。残念ながら下部を欠いているが、末広がりの脚部を呈するものと想定される。

2—5はいずれも脚部のみの残存であり、この状態からは器台になるのか高坏の脚部になるのか判断は困難である。ここでは、いずれも透かし窓が穿たれている点に注目される。

6—9も脚部であるが、6は筒形の胴部を呈することが想定され、器台に復元することができよう。9はかなり径が大きいため、高坏の脚部よりも器台に復元しうる可能性が高い。

10—13は胴部の破片であるが、凸帯が確認され、1のような器台の部分と想定することができる。

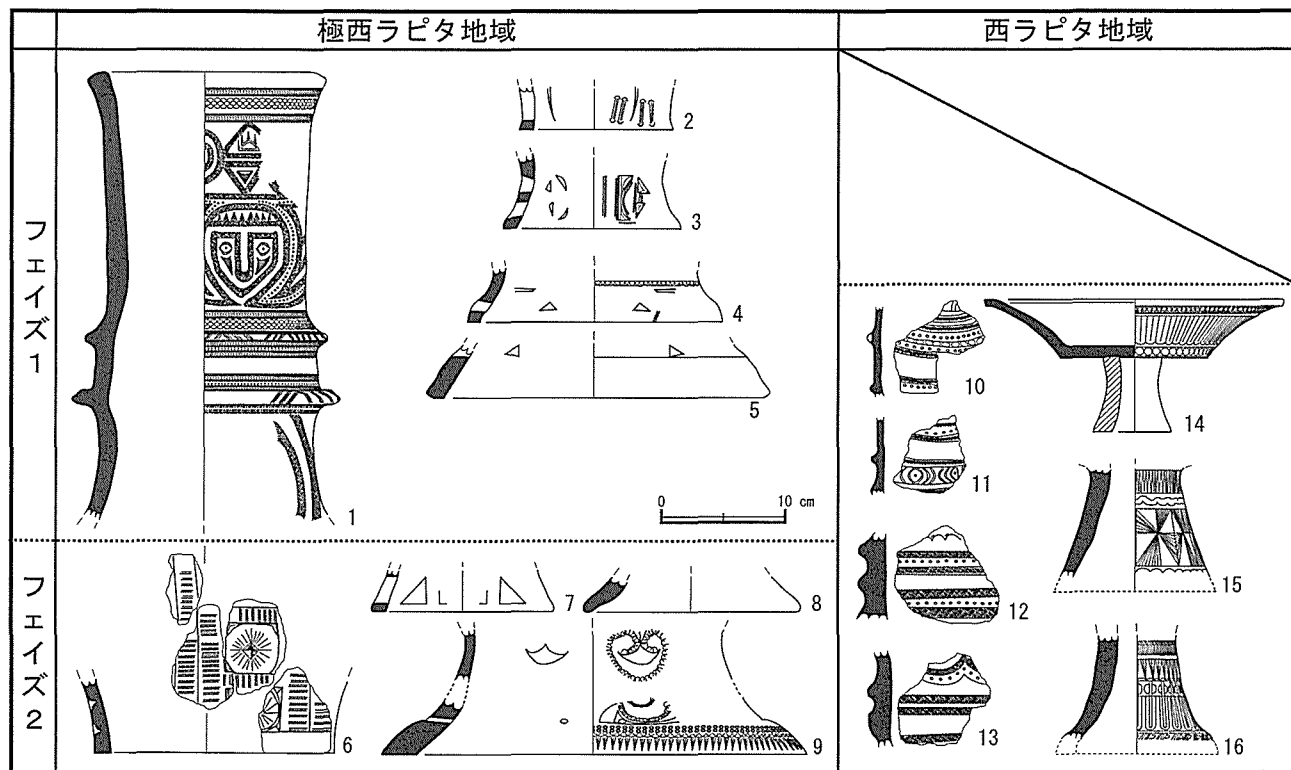


図4 器台・高杯の編年図 (1: Talepakemalai, 2-9: Adwe, 10-13: Nenumbo, 14-16: New Caledonia) (S=1/6)

Source: Best 2002; Kirch 1997b; Summerhayes 2000

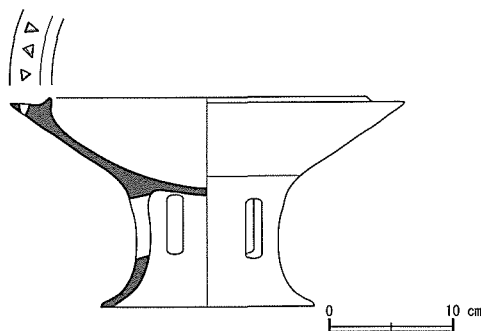


図5 ニューギニア・コリングウッド湾で発見されたポストラピタ期の高坏 (after Egloff 1971) (S=1/6)

14は、脚部は残存していないが、平底皿の底部に脚部につながる接合痕を確認することができ、高坏であることがわかる。

15、16は脚部の端部（接地部）を欠いているが、筒状を呈し、また径が小さいことから、高坏の脚部として復元するのが妥当である。

これらの資料の時期的・地域的な分布に着目してみると、フェイズ1から2にかけての極西ラピタ・西ラピタ両地域には分布するが、フェイズ3には見受けられない。さらに東ラピタ地域には類例を見出すことができない。分布の限界がニューカレドニアにあることから、フェイズ2の段階でフィジーに拡散する以前に、これらの形式の土器がラピタ土器の組成から脱落したものと判断される。また地域的な差異として、極西ラピタ地域の

ものは透かし窓を設ける傾向にあること、また、ニューカレドニアでは器台に復元される例はなく、サンタクルーズ諸島からニューカレドニアに拡散する段階で器台が組成から脱落した可能性が高いことが指摘できる。

ちなみに、図5の高坏はニューギニア島で発見されたポストラピタ期に位置づけられるとみなされる資料である。この資料はかつてはフィリピンの金属器文化のひとつであるノヴァリチエス土器複合との関係を示すものと指摘されたことがあったが（ベルウッド一九八九、三五二頁）、脚部に透かし窓をもつ特徴は極西ラピタ地域のラピタ土器と共通し、その伝統を受け継いだものである可能性も指摘できる。ただし、現状ではフェイズ3にミッシング・リンクがあり、直接の影響関係を指摘するには至らない。

「セット」としての土器様式とその変化

以上の分析で明らかになった、器台・高坏の土器組成からの脱落はどのような意味をもつのだろうか。ここでは、「ラピタ土器様式」の変化、もしくは解体のプロセスとしてそれを理解することにした。

「様式」という言葉は手垢にまみれており、少なくともここで定義しておいてやらねばならない。ここでの「様式」は単にstyleの訳語ではなく、「様式論」を射程に含めている。つまり、複数の形式（器形）、複数の系統の土器の組み合わせからなる一定の組成そのものを「様式」として認めることとする。例えば、テーブルの上に並んだ皿・コップ・一升瓶などのセットもひとつの「様式」を構成しているものとする。

ラピタ土器も、器形にバリエーションが見られることから（図3）、それぞれ用途別に作り分けられていることが直感的に想定される。例えば図3の「type 1」などは皿としての用途が、「type 10」などは水瓶もしくは壺としての用途が想定できる。他にも、貯蔵用、調理用など、さまざまな用途に合わせた器形があるものと考えられる。こうしたとき、器台・高坏といった器形は特に儀礼的なコンテキストとの結びつきの強さを想定させるものである。器台については、前述した出土状況に加え、土器を供献するときに用いられる用途が想定できるからである。また高坏は、食器としての用途が想定されるが、図3の「type 1」といった皿形の器形と比較しても製作に手が込んでおり、精製品であつたものと想定される。

そこで、本論で「ラピタ土器様式」と設定するものは、これら儀礼および日常の食卓・調理・貯蔵などの土器使用のコンテキストにあわせた土器のセット関係である。そこに、一定の用途に一定の器形が対応するという「規制」が存在したと想定しよう。ならば、器台・高坏といった器形の脱落は、それが使用される（と想定される）儀礼のあり方の変化を反映したものと理解することができる。

用途と器形が対応する「規制」の存在を考古学的に証明することは困難である。しかし、Nunembo 遺跡における空間

分析では、土器の器形ごとに排他的な分布を示すことが指摘されている（Shepard and Green 1991）。こうしたことは、少なくとも使用の場における規制を示すものと解釈できる。

ならば、器台・高坏の脱落は、儀礼の変化を示すと同時に、儀礼空間における土器の果たした役割の低下を意味するといえよう。さらにこうしたことは、ラピタ土器様式の規制が弱まった、もしくは崩れたものとして理解することができる。つまり、しかるべきときにしかるべき土器を用いるという当初の文化的なコードが変質したということである。こうした土器様式の規制はいわばひとつのイデオロギーであり、儀礼の本身それ自体と比べても、同じくらい重要な意味を持つ。つまり土器様式の変化はイデオロギーの変化であり、それはイデオロギーが共有された集団間の社会的な関係性の変化にまで結びつくからである。このような、本来の様式の関係性からの逸脱・変化を本論では「様式の解体」と位置づけよう。

小 結

以上の分析から、器台・高坏はフェイズ2の段階で組成から脱落したこと、そしてそうした土器様式の変化は社会的な変化と対応しうることが指摘できた。こうした変化のプロセスは、前稿（Shimura 2002）で示したラピタ土器の文様の変化および黒曜石の分布の変化（図2参照）と軌を一にするものであるといえる。つまり、フェイズ2から3にかけて大きな変化が生じているという点が重要である。このプロセスにおいて、文様の変化では「人面文」などの複雑な文様の衰退が認められ、また黒曜石の分布ではビスマルク諸島タラセア産黒曜石の広域流通が縮小し、長距離交易の衰退が想定されたと解釈した。器形のセット関係から見たラピタ土器様式の解体のプロセスも、やはりイデオロギーとしての情報の共有の衰退として理解できる。これらはひとつの連動したプロセスとして理解すべきである。

またラピタ土器様式の解体プロセスは、時期的な変化のみならず地理的な分布にも対応する。フェイズ2においても、

東ラピタ地域のフィジーには器台・高坏が及んでおらず、また器台の分布の限界もいまのところサンタクルーズ諸島までである。ラピタ文化複合の西から東への拡散過程から考えると、フロンティアに行くほど本来の土器様式の規制が弱まっているものと考えることができる。情報のフローから見ると、周縁地域ほどその欠落や脱落が多くなり、イデオロギーの共有が困難になるものと考えられる。つまりラピタ文化複合は、その分布範囲が広がれば広がるほど、その文化的一体性を維持することが困難になるというジレンマを抱えていたと評価することができよう。

3 ラピタ土器の施文技法の分析とその編年的考察

狭義のラピタ土器とは、いわゆる鋸歯印文 (dentate stamp) によって文様が施された土器を指すが、実際にラピタ土器様式を構成する土器の施文技法は多様であり、代表的なのは次の3種である。

(ア) 鋸歯印文 (dentate stamp) 櫛状の工具を押捺することで施され、列点によって表現される文様。

(イ) 沈線文 (incised) 篋状の工具で器面を引っ搔くことで施される文様。

(ウ) 叩目文 (paddle-impressed) 敲打具の痕跡がそのまま器面に残され、装飾的效果をもつ文様。

この他にも、爪形文や貝殻文などが僅かに存在する。もちろん、無文土器も土器様式の重要なコンポーネントである。これまでのラピタ文様の研究はほぼ鋸歯印文についてのみ限定されており、その他の検討は未だ不十分である。そこで本章では、特に沈線文と叩目文について編年的な検討を加えることとしたい。

沈線文土器の編年的検討

沈線文土器が注目されたのは、J. Garanger (1971) がヴァヌアツ (ニューヘブリデス諸島) のマンガアシ土器の分析を通じて、これがラピタ土器 (鋸歯印文土器) に先行するメラネシア先住民の土器伝統であり、ニューギニアまで広く分布する

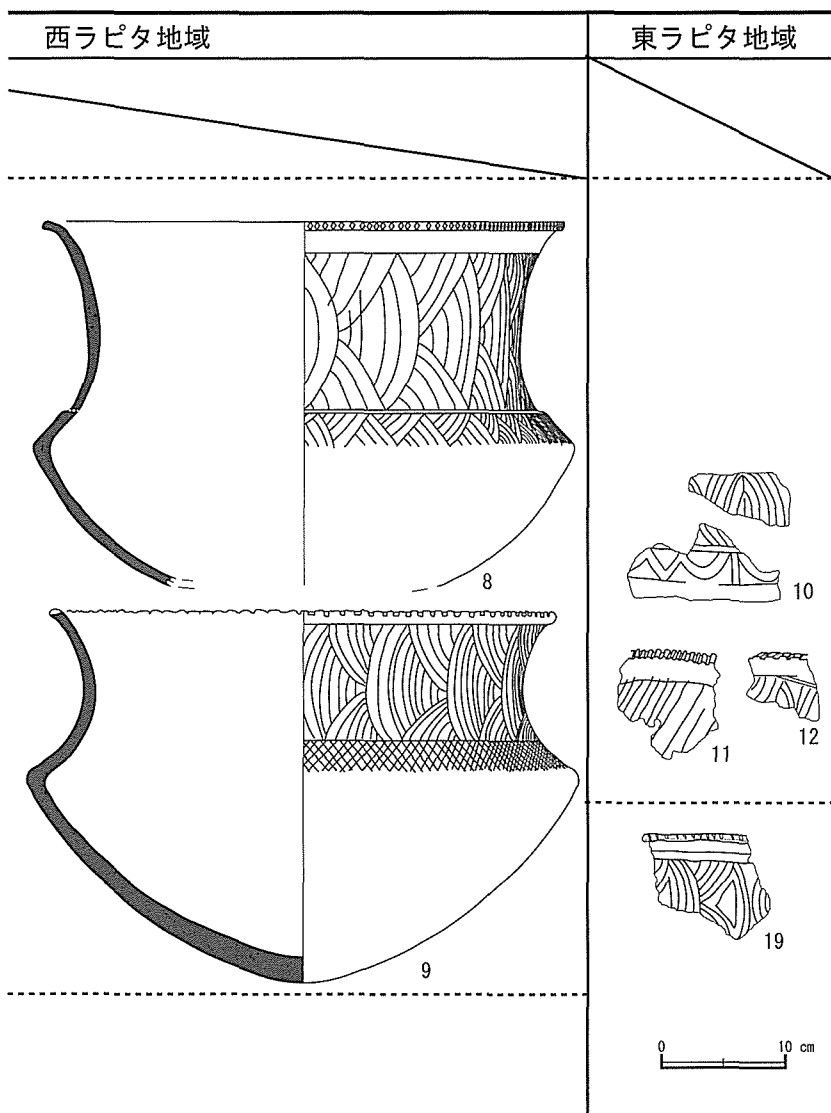
という見解を示したときである。しかし近年、Garanger のマンガアシ土器の編年は誤りで、ずっと新しい（2000-1600 BP）土器であることが判明した（Bedford et al. 1998）。Garanger によってマンガアシ土器に関連があるとされたブカ島のソハノ土器などのニューギニア周辺の土器も、ラピタ土器に後続する土器であることが明らかにされている（Wickler 2002）。

実際ラピタ土器と共伴する沈線文土器は、図6に掲げた一群の土器である。その特徴は、マンガアシ土器ほど貼付文が顕著ではなく、クロスハッチ・弧線などが主体をなす文様で構成されている。これら文様の一部は鋸歯印文のモチーフとも共通するが（4など）、弧線を多用する文様（8、9）などは沈線文にユニークなものである。Best（2002）は、沈線文文様の中には鋸歯印文による「人面文」が変化したものがあることも指摘している（例えば6）。そして器形においては、7-9、15の様に、ラピタ土器に典型的な器形を示すものも多い。

表2から、沈線文土器がアセンブリッジ内で占める割合を見てみよう。ここで数量的データを提示することができたのは、13遺跡、16アセンブリッジである。算出方法については、土器片全点に対する割合を算出している。ただしTalepakenalai遺跡のみ、全点数が明らかになっていないが、比率だけは単独で報告されているため、その数値を当てた。

フェイズ2において比較的高率を示すことが注目される。続くフェイズ3になると、西ラピタ地域では比較的高い割合を維持するのに比べ、東ラピタ地域では極めてまれな存在になる。これはフェイズ2のNaigani遺跡が高率（27.9%）だったことに比較すると急激な低下である。

この事実はフィジーにおける編年上の区分に大きく関連する。筆者がフェイズ2に位置づけたNaigani遺跡と、フェイズ3でも初期（前期東ラピタ・スタイル）に位置づけられるNatunuku遺跡、Yanuca遺跡とは、放射性炭素年代からは年代的に開きは認められない（Anderson and Clark 1999）。しかし土器の文様の観点からは差異が認められる。既にKay（1984）はNaiganiの文様がフェイズ2の西ラピタ地域のものと同様であることを指摘している。さらに、比較的明瞭な



7-8: New Caledonia, 9: Nunembo, 10-12: Naigani, 13-14: Apalo, 15: Lamau, Kay 1984;

Kirch 1988a; Sand 1997b; Summerhayes 2000

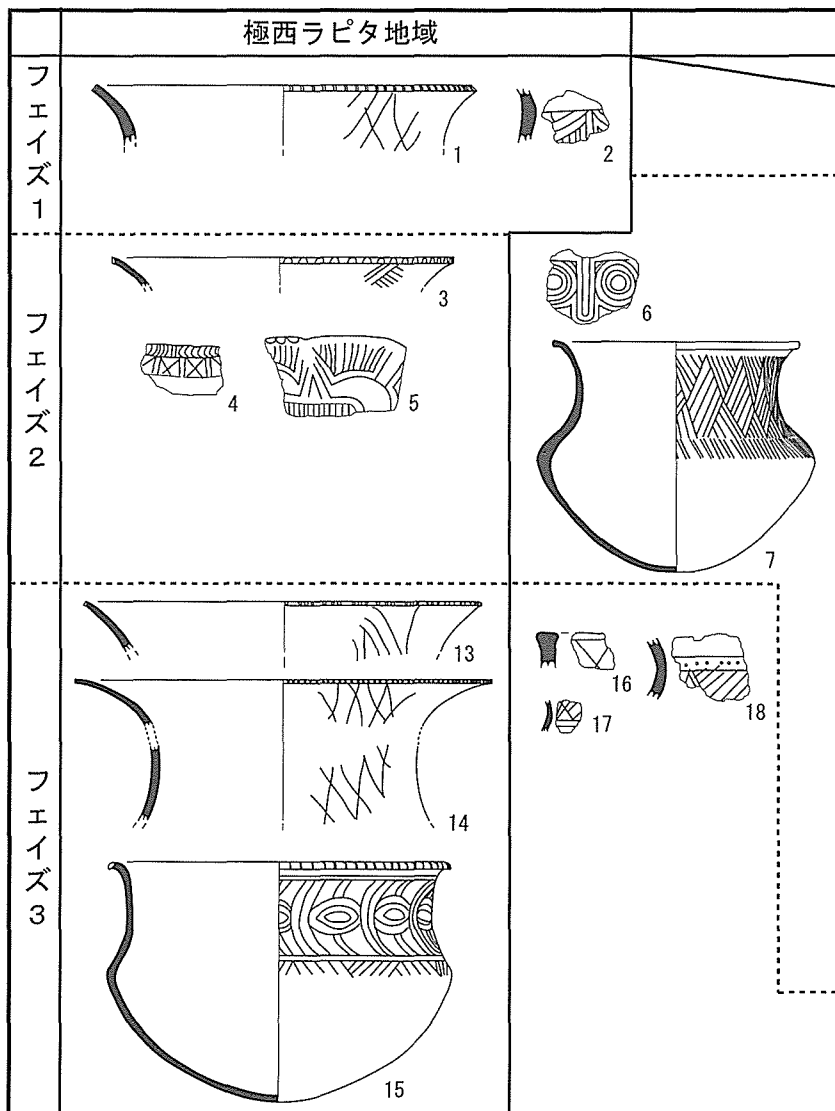


図6 沈線文土器の編年図 (1-3: Adwe, 4-5: Talepakemalai, 6: Nangu, 16-18: Erromango, 19: Nukuleka) (S=1/6)

Source: Bedford and Clark 2000; Burley et al. 2001; Donovan 1973a; Gorecki et al. 1991

表2 施文技法の組成

時期	地域	遺跡名	鋸歯印文	沈線文	叩目文	N=
フェイズ 1	極西ラピタ	Talepakemalai area B (C3)	10.5	0.5		?
		Adwe (unit A-B)	4.2	0.4		3617
フェイズ 2	極西ラピタ	Talepakemalai area B (C1)	9.0	7.0		?
		Adwe (unit C-D)	3.0	0.7		4076
	西ラピタ	Nanggu (SZ-8)	61.9	27.5		3654
		Nenumbo (RF-2)	54.9	29.9		4545
	東ラピタ	Vatcha (Layer IV)	26.7	5.5	0.7	438
		Naigani	33.0	27.9	0.7	2937
フェイズ 3	極西ラピタ	Apalo	1.5	2.7		6998
	西ラピタ	Ngamanie (RF-6)	61.3	18.1		1549
		Vatcha (Layer II)	30.7	7.9	2.3	215
	東ラピタ	Natunuku (Layer 6)	22.3	0.5	0.5	373
		Yanuca (Layer 3)	6.5	0.0	3.2	2510
		Nukuleka	9.1	0.8		4087
		Ha'ateiho	1.5	0.4		11153
		Sigatoka	5.6			125

Source: Birks 1973; Burley et al. 2001; Davidson et al. 1990; Donovan 1973a; Frimigacci 1975; Hunt 1980; Kay 1984; Kirch et al. 1991; Summerhayes 2000

「人面文」(Type 11)がNaiganiには存在するのに対して、Natunuku遺跡、Yanuca遺跡では欠落する(Ishimura 2002)。こうしたことから、Naigani遺跡とNatunuku・Yanuca両遺跡とは、編年的に明瞭な分離が可能である(Ishimura 2002)。Naigani遺跡ではタラセア産黒曜石も出土しており(Best 1987)、これは西の地域との結びつきの強さを示すものである。こうした事実、この遺跡が東ラピタ地域における創立者によるものであった可能性を示唆する。いずれにせよ、沈線文土器のこの急激な消滅は、筆者の提示する編年区分の妥当性を裏付けるものであり、フェイズ2から3にかけて東ラピタ地域では急激な変化が生じたことが示唆される。

叩目文土器の編年的検討

ラピタ土器はいわゆる「叩き板と金敷」技法により製作されている。しかし一般に表面の叩き板の痕跡は丁寧になデ消され、内面には金敷に用いた川原石の痕跡が残されるのが通常である。しかし中には、叩き板の痕跡を残し、装飾的效果を示す土器も存在する。以下では、こうした土器の位置づけを検討してみよう。

ニューカレドニアには、主に並行した条線を残すポドタネアン土器という叩目文土器が存在し、不思議なことにこれらは鋸歯印文土器と

は排他的に分布する傾向にある。当初、この土器の年代はラピタよりも古いと示されたため、ラピタ人に先行する先住民族の土器と理解されることもあったが（Galipaud 1992）、実際にはラピタ（鋸齒印文）土器と並行することが判明した。そうしたことから、ポドタネアン土器はラピタ土器の製作の過程から派生した土器であると考えられている（Sand 1996）。

フィジーにも同様の叩目文を示す土器が存在し、ナヴァツ土器と呼ばれる。しかしこの土器とラピタ土器との関係もまた問題をはらんでいる。Sigatoka 遺跡ではレベル1からラピタ土器が、その上層のレベル2からナヴァツ土器が分離して出土している。しかしYanuca 遺跡の土器を再検討したHunt（1980）は、鋸齒印文と叩目文が層的に相伴する見解を示した。だが熱ルミネセンス法による分析では両者に年代的開きがあることが示され（Prescott et al. 1982）、近年ではYanuca 遺跡の層位は攪乱を被っており両者が混在したという見解が表明されている（Best 2002: 28-30）。Best（1984）のLakeba 遺跡の層位的所見では両者は明確に分離しており、後者には1750 BP頃の年代を与えている。Sigatoka 遺跡の近年の調査（Marshall et al. 2000）でもラピタ期とナヴァツ期は出土層位・地点ともに分離可能で、後者にはAD 200頃の年代を与えている。こうしたことから、ニューカレドニアのポドタネアン土器とは異なり、ナヴァツ土器はラピタ土器様式のコンポーネントでないと判断される。

ニューカレドニアではフェイズ3に鋸齒印文のラピタ土器が消滅するのに対して、ポドタネアン土器は紀元後あたりまで存続する（Sand 1996）。従って、フィジーのナヴァツ土器にポドタネアン土器が影響を与えたとしたならば、ラピタ土器が消滅した後ということになろう（図7）。ナヴァツ期になると、フィジーにヴァヌアツのバンクス諸島産の火山ガラスが搬入されるようになり（Best 1984）、西の地域との関係が再び強くなる。叩目文の系統も、そうした流れでもたらされた可能性が高い。

ふたたび表2で叩目文の時期的・地域的分布を見てみよう。Vanua 遺跡で確認されるものはポドタネアン土器であるが、IV層からII層にかけて若干の増加が見られることから、ニューカレドニアにおいてこれがメジャーになっていく流れ

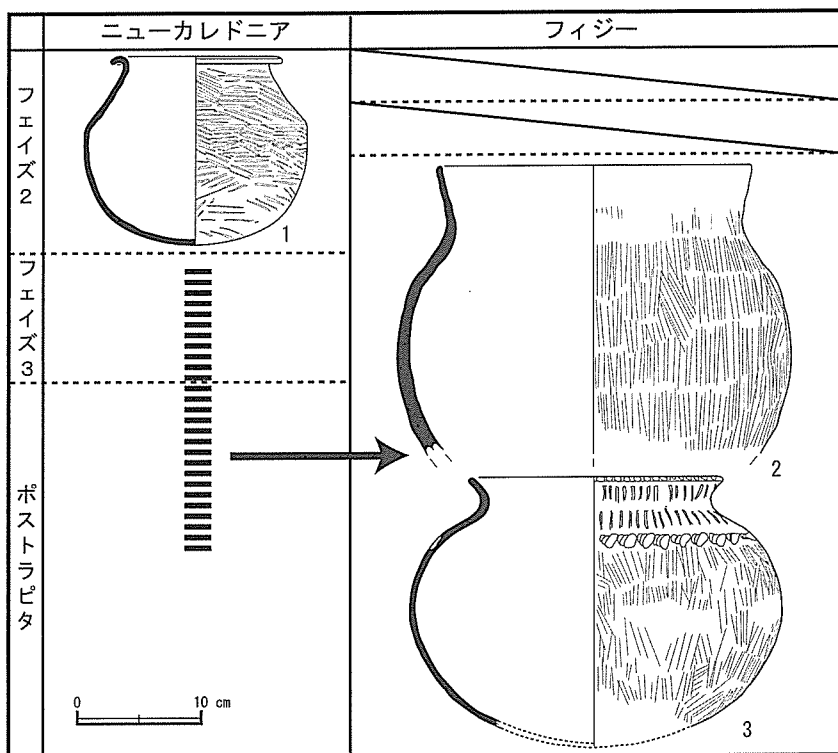


図7 叩目文土器の影響関係 (1: LTA037, 2-3: Sigatoka) (S=1/6)

Source: Birks 1973, Sand 1997b

に連続していくものと考えられる。フィジーの遺跡で若干確認されるものは、前述のとおりナヴァツ期の混入の可能性が高いと判断される。それ以外の地域では確認されない。このことから、叩目文土器（ポドタネアン土器）はニューカレドニアで地域的に独自に発生した系統と理解することができよう。

小 結

このように、ラピタ土器は単に鋸歯印文のみならず沈線文土器、叩目文土器、さらに大多数を占める無文土器といった複数の系統の土器群によって構成されている。こうしたセットによる関係性もまた、ラピタ土器様式を構成したものと考えられる。

このうち、フェイズ3において沈線文土器が、特に東ラピタ地域で衰退すると

いう事実が、文様および器形で確認された流れと符合することは注目値する。すなわち、前章の分析によって示されたラピタ土器様式の解体のプロセスに符合した流れを示すからである。またニューカレドニアにおける叩目文土器の派生も、当初の土器様式からの逸脱と評価することができる。

ここで、装飾技法におけるバリエーションから土器様式を評価するときに、どのような基準を持ち出せばよいか検討してみよう。

第一に挙げられる点は、施文に要する労力の差である。鋸齒印文は、小型の櫛状、齒車状のスタンプを複数組み合わせで施文されており、その密度も精緻さも極めて高度である。そこには大変な技術と労力が投下されている。一方、沈線文土器にはそれほど複雑な文様が描かれることはなく、施文本体も単純である。従ってかけられた労力は低い。無文土器は以上に及ばずだが労力コストはゼロである。こうした労力の差は、土器の価値に反映されると想定するのが妥当であろう。

第二には、器形の場合と同様、用途の差である。前述したとおり、装飾技法は異なっても共通した器形を採用する例も多いので、こうした場合は用途の差を想定するのは困難である。しかし、少なくとも器台・高坏に関しては、鋸齒印文を施すのが基本となっている（図4参照）。これらの儀礼的コンテキストとのつながりはすでに指摘したが、施される施文技術にも何らかの規制があったことが想定される。

以上の二つの基準から、装飾技法の差は、土器の価値を反映するものと判断するのが妥当である。つまり最上位に鋸齒印文土器を置き、沈線文土器、無文土器が続くという三段階の階層性を想定することが可能なのだ。

こうした階層性は、例えば儀礼用と日常用、あるいは首長用と平民用といった区分を示していた可能性がある。Neunumbo 遺跡の空間分析では、鋸齒印文土器、沈線文土器、無文土器の分布に一定の傾向と排他性があることが示されている（Sheppard and Green 1991）。Talepakemalai 遺跡でも同様の傾向があることが示唆されており（Kirch 1988a）、こうしたデータは階層性の想定 of 妥当性を裏付けるものである。

しかしこうした階層性は、フェイズ3の東ラピタ地域において顕著に解体を見せる。沈線文土器がほぼ消失することにより、土器の階層性の表示はより単純（二階層）になる。さらに、ポストラピタ期に至ると、全地域で階層性の解体が認められる。つまり鋸齒印文土器が一斉に消滅するとともに、ビスマルク諸島では沈線文系の土器（Walhøe 1999）、ヴァヌアツではエルエティ土器（沈線文系）およびボナムラ土器（押型文系）（Bedford and Clark 2001）、ニューカレドニアではポダネアン土器およびビュエン土器（沈線文系）（Sand 1997a）、フィジーではナヴァツ土器、トンガおよびサモアではポリネシア無文土器へと移行する。これらの新出の土器系統は、ラピタ土器様式から派生したものであることは確かであるが、地域的に独自の派生を遂げたものである。しかし、ラピタ土器様式で見られたような、複数の系統の土器により構成される階層性はそこにはなく、単系統の様相を示す場合が多い。この段階に至って、ラピタ土器様式の階層性は完全に解体したと認められる。

このように、装飾技法から見た土器様式の解体からも、土器の社会的な役割の低下を読み取ることができる。それは2章の器形の分析から見出されたプロセスと符合するものである。そこで最終章では、ラピタ土器様式の解体と社会変化の問題を検討することしよう。

4 考 察——ラピタ土器様式の解体——

筆者が前稿（2002）で示した、文様が退化していくのと同様のプロセスは、本論における器形・施文技法の分析結果によっても確認することができた。つまりフェイズ2から3にかけて、文様の衰退、器台・高坏といった器形の脱落、沈線文土器の脱落といったプロセスが軌を一にして進行していることが確認された。このプロセスは、黒曜石流通の衰退および長距離交易の解体と連動している可能性が高い。そしてこれらの一連のプロセスは、フェイズ3の終わりとともにラピタ文化複合の特徴であった鋸齒印文土器が各地で消滅し、文化的一体性が完全に喪失してしまうプロセスへと連続するも

のである。

こうした一連の分析で明らかにした最も重要な点は、従来考えられてきたようにラピタ文化複合は突発的に姿を消すのではなく、実は拡散を進行している途中から既に解体のプロセスも同時進行していたという点と、フロンティアである東ラピタ地域で解体が顕著に認められる点である。こうしたことから、ラピタ文化複合は外在的な要因によって解体を余儀なくされたのではなく、実はそのシステム自体に解体の要因が内在していたために起こったのではないかと考えられるのである。

そこでこの最終章では、ラピタ文化複合のシステムそれ自体の性質を検討し、そこから「エンド・オブ・ラピタ」のプロセスを考察することとしよう。

ラピタ人の植民戦略

ラピタ文化複合の最大の特徴は、その拡散スピードの迅速さにある。もちろん移動を可能とした航海技術も重要であるが、彼らの植民戦略もかなりユニークなものであったようである。

常識的には、集団が移動して植民活動をおこなう動機は、人口増加により住む土地が減少し、新天地を求めるというものが考え付くだろう。環境収容力の上限に達し新たな資源を求めるとか、自然災害や戦争により土地を追われたという理由も考え付くだろう。しかし、そのいずれもラピタ人には当てはまらないようである。

ラピタ人は集落を営むにあたって、土地が豊かで大きな島よりも、その周囲に付随する小島のような場所を選択することが多い。また、大きな島に住む場合も、ラグーンに面した沿岸部を好み、内陸部にはほとんど進出しようとしな（Lepofsky 1988）。少なくともラピタ集落の分布と規模のデータからは（ind）、その人口密度はかなり低いものと判断される。そのため、人口圧や環境収容力をラピタ人の移動の動機として認めることは困難である。

ではラピタ人を大海原に駆り立てた動機はいつたい何だったのだろう。冒険心やロマンという要因も捨てがたいが、検証不能なのでひとまず保留する。それより、ラピタ人はフロンティアに至った後も、彼らのホームランドおよび他の植民した島々との間で引き続き交流をおこなっている事実を見逃してはならない。実はそのような行動の背景に、真の動機が潜んでいるのではないだろうか。

ラピタ威信財システム

前述のとおりラピタ人は黒曜石をはじめとする様々な物資を島嶼間で交換しており、これを交易システムと見るのが一般的である (Green and Kirch 1997)。そうしてこうした交易の背景には、威信財の入手と再分配に基づく社会の再生産システムを想定する意見がある (Friedman 1982; Kirch 1988b)。筆者もそうした観点から、ラピタ威信財システムの復元を試みている (石村二〇〇四)。

そのモデルで重要な観点は「ホームランド効果」 (Kirch 1988b) である。これは植民者が由来した祖集団 (mother community) と植民集団 (colonial communities) の間にはライフライン (命綱) に似た紐帯が存在するということである。植民集団の人口規模は当初は小規模であり、新しい植民地の環境に馴染むまでは、相当不安定な状況に置かれる。例えば、早魃や津波によって容易に窮地に追い込まれるかもしれない。また、小規模な人口構成では、人口の再生産 (繁殖) ですら限定された条件に置かれる。そのため、祖集団から物資や人間 (婚姻者) の供給を受けることによって、植民集団は安定した成長を保障されるのである。

こうしたとき、次のような想定が可能となる。祖集団と植民集団の間には上下の序列がなされ、植民集団内では祖集団との紐帯の強さを示すことがイニシアティブを握ることとなる。そこで、祖集団からもたらされる物資が威信財として機能し、さらに祖集団との儀礼様式の共有がその支配の根拠となる。

こうした威信財としての機能を想定できるものとして、筆者は黒曜石とラピタ土器を挙げたい。しかし実は、この二者は実際のものの動きから見ると様相を異にする事がわかる。そしてその差異こそが、ラピタ威信財システムを特徴付ける「二重構造」であると評価することができるとだ。

「動く威信財」と「動かない威信財」

黒曜石は最も移動が確認しやすい遺物である。ラピタ人が利用した黒曜石の主な産地はニューブリテン島のタラセア、アドミラルティー諸島のロウ、バンクス諸島、トンガ列島内のタファヒ島が挙げられる（図2）。このうちに量的に最も多いのはタラセア産のものであり、その分布範囲も格段に広い。ロウのものはタラセア産を補うように利用されているが、ポストラピタ期になるとビスマルク諸島周辺では前者を凌駕するようになる（Sheppard 1996）。バンクス諸島、タファヒ島のもものは分布範囲も狭く、積極的に利用されているとはいえない。例えば、サンタクルーズ諸島では、バンクス諸島の方が距離的には近いにもかかわらず、その黒曜石の供給源をほとんど（98%）をビスマルク諸島の二つの産地に依存している（Green 1991b）。

このようにビスマルク諸島、特にタラセア産の黒曜石の分布には、強い文化的な志向が働いている可能性が高い。特にフェイズ2ではラピタ分布の全域に供給されている。このことを威信財システムのモデルから解釈すれば、ビスマルク諸島が他の地域のラピタ集団にとってのホームランドであり、黒曜石はそこからもたらされた威信財であるとみなすことができる。

黒曜石を威信財とみなす間接的な理由もある。それはそのツールとしての実用性である。黒曜石は多くの場合、剥片もしくは石核の状態で遺跡内に搬入されており、二次調整により明確なツールとしての姿を示さない。このことは、プレラピタ期およびポストラピタ期の黒曜石がツールとして加工されていることに比べると興味深い（Torrence 1992; Fullagar

and Torrence 1991)。剝離技術には両極技法の例が確認されるが (Kirch and Yen 1984: 267)、両極技法は石核が消耗しきつたときの剝片生産、もしくは礫の分割に用いられる技法である。こうしたことから、黒曜石はツールとしての実用性よりも、あたかも宝石のような扱いを受けていたことを想起させる。それらを分割しながら、手から手へ、島から島へと (down-the-line) 流通していったのだろう。

このように、黒曜石は実際にそれ自体が移動していたと考えられる。では土器の場合はどうだったのか。

黒曜石が蛍光X線によって産地同定をおこなうことができるのと同様に、土器は胎土分析により産地同定をおこない、その移動をトレースすることができる。特に島嶼の場合、島ごとに特徴的な鉱物組成を示すことが期待されるので、その方法論の有効性は高い。たとえ産地を同定できなくても、島の粘土を用いているか、島の外からの搬入かの判別は比較的内容である。

結論から示すと、土器の場合、黒曜石のような長距離の移動を確認できる例は少ない。土器自体が移動し、遺跡内に搬入されている例は確認することができ、例えば Talepakemalai 遺跡には12もの異なる産地の土器が搬入されている (Hunt 1989)。しかし、その他のピスマルク諸島の遺跡 (Green and Anson 1991; Summerhayes 2000)、メラネシア地域 (Dickinson 1978)、フィジー (Best 1984)、サモア (Dickinson 1974) などのデータを見る限り、基本的には在地の粘土を用い、粘土の不足する島では外から搬入されるという状況が確認される。

この事実、文様において島嶼間で著しい共通性を示す事実と対比すると興味深い。こうした状況を説明するには、土器は在地で作られるが、文様の情報は島嶼間で交換されるというモデルを想定するのが妥当である。

筆者は土器の文様はイデオロギーの表象であると考えている (Tshimura 2002)。土器自体が交換されないことと、文様が施されたラピタ土器が威信財の機能を担ったとの想定とは矛盾しない。なぜなら、威信財は必ずしも外部から搬入されなくとも、外部との紐帯を表象していれば十分に機能するからである (石村二〇〇四)。つまり、ここで文様情報を共有す

るということは、祖集団や他のラピタ集団と儀礼様式を共有することであり、それにより社会秩序の再生産が図られていると理解することができるのである。

こうした二つの威信財のあり方から、ここで「動く威信財 (movable prestige-good)」と「動かない威信財 (immovable prestige-good)」という二項図式を提示したい。そして黒曜石は「動く威信財」、ラピタ土器は「動かない威信財」として位置づけることができるだろう。

こうしたとき、「動く威信財」のほうが「動かない威信財」よりも早い段階で解体のプロセスが進行している点に注目すべきである。フェイズ3の段階になっても、ラピタ土器は東ラピタ地域のトンガ・サモアまで分布を広げているのに対し、黒曜石はビスマルク諸島産のものが大きく分布を狭めており、流通の衰退を示している(図2)。このことは、物資よりも情報の方が交換に要するコストが低いため、比較的長続きしやすいということによるものと理解できる。^①

こうした威信財の「二重構造」から、ラピタ文化複合の威信財システムにおいては情報の共有ということが重要であることが指摘できる。つまり、単に威信財のみが交換され、見た目の上で文化的な斉一性が認められる (Terrell 1989) というのではなく、威信財を用いた社会的再生産システムのイデオロギーが集団間で共有されていたということが、ラピタ威信財システムの特質として重要なものである。こうした理解は、本論で示したイデオロギーとしてのラピタ土器様式という概念とも符合するものである。そして、祖集団と植民集団との序列関係に基づく威信財システムという想定が妥当であることを示すものである。

エンド・オブ・ラピタ

最後に、このようなラピタ文化複合の特質を踏まえたうえで、その拡散における目的・存在理由 (end) と終焉 (end) の二つのエンドについて考察することしよう。

ラピタ社会が祖集団と植民集団との序列関係を威信財システムによって構築しているというモデルを想定したとき、その社会システムは安定に向かうというよりも、より拡張していく指向性を持つことが予想される。なぜなら、植民集団にとって、その下位の序列を解消するためには、今度は自分たちが祖集団となって、新たな植民地を得ようという欲求が生じるはずだからだ。こうした視点から考えた場合、植民地の拡大と威信財システムはどちらが原因であり結果であるかを言うのは難しくなる。システムの両者はフィードバックの関係にあるのだ。

つまりラピタ威信財システムは、そのネットワークを拡大しようという指向性があり、このモデルからは、ラピタ拡散の動機はまさにそれ自体に内在する、ということができる。これがラピタ威信財システムの一つのエンドである。

しかし、このシステムの拡大には物理的な制約が存在する。ひとつは、ネットワークは樹形図状に展開していくため、その規模・複雑さも指数関数的に増大していくという点である。つまり、親集団から分派して植民した子集団も、今度は親として子を産み、孫集団を作っていくことを繰り返すことによって、集団の親子関係はどんどん数が増えることとなる。そうすると、これらをひとつのイデオロギーなりアイデンティティーなりで一体性を保持するのは困難になってくると想定される。特にネットワークの末端に行けば行くほど、物資や情報の伝達における欠落が生じやすくなると考えられる。つまり、こうした交換システムが維持できる地理的もしくは人口的な規模の限界が物理的に存在するということがある。そしてもうひとつは、空間的な制約である。リモート・オセアニアの地域は、島が均一に分布するのではなく東西の直線上に分布し、島嶼間の距離も東に行けば行くほど増大し、密度は疎になる。特に安山岩帯を超えたところに位置するサモアのような火山島は、まさに絶海の孤島といえるようなところである。そのため、しだいに移動のコストとリスクが増大していくこととなったのだ。この二つの制約のため、許容可能なコストが閾値に達したとき、システムの崩壊が起こればと考えられる。

この崩壊の過程は、考古学的なデータによって前稿と本稿によって示してきたとおりである。まずフェイズ2から3の

段階において、「人面文」をはじめとするラピタ文様の衰退、ビスマルク諸島産黒曜石の分布の縮小、器台・高坏の脱落が認められ、さらに東ラピタ地域では沈線文土器の脱落が認められた。特に後者の点については、東ラピタ地域はラピタ・ネットワークの周縁に位置し、物資・情報の交換におけるコストがかかりすぎるため、ネットワークの解体が著しく進化したと評価することができる。

最後に、ラピタ文化複合の分布の限界についても評価しておこう。ラピタ人の拡散がなぜサモアで停止したかについては、かつて活発な論議が繰り広げられた。J. Irwin (1994) や Kirch (1986) らは、拡散は停止せずコンスタントに進行し、サモア以東でのラピタ遺跡はサンプリング・エラーのため未発見であるのに過ぎないと考えていた。しかしクック諸島の徹底的な考古学調査でもラピタ遺跡を発見することはできず、現在では、サモアで一〇〇〇年以上拡散は停止し、その後マルケサス諸島までいっきに拡散したと考えるのが一般的となっている。しかし、なぜ拡散が止まったかについては明確な理由を示せないでいた。

しかし本論の議論から、そのひとつの回答を提示することができるだろう。すなわち、サモアに至った段階でラピタ・ネットワークはその限界に達し、解体を余儀なくされたためである、と考えられるのだ。このことは、サモアに到達したフエイズ3における黒曜石流通の衰退やラピタ土器様式の解体の事実と符合することからも支持される。そしてこれが一ひとつのエンド・オブ・ラピタといえよう。

しかしこれですべての問題が解決したわけではない。本論のモデルが示すようにシステムの限界によってその崩壊が起こった場合に、なぜそれがシステムの急激かつ全面的な解体にまで至ったかについては、これまで扱ったデータでは説明できない^②。場合によっては、システムの規模を縮小することで対応するという選択肢もありえたかもしれない。例えば、メラネシア各地においてクラ交易などの交易網が民族誌で確認されているが、これをラピタ威信財システムの残存と見るか (Friedman 1982) もっと新しい時代に成立したものと見るかによって、ラピタ威信財システムの解体プロセスに対す

る理解が変わってくるだろう。こうした問題を解決するには、ラピタ文化複合の解体以降の各地域における社会変化をトレースしなければならないが、こうしたデータは今のところきわめて不十分と言わざるを得ない。

こうした観点から筆者は、特にフィジーと西ポリネシア地域を中心に、ラピタとそれ以後の社会変化のプロセスを明らかにすべく実地調査を継続中である。本論で残した宿題は、今後の研究によって解明していくこととしたい。

① 例えばA地域からB地域にある文様の土器が伝播する場合、現物を搬入する場合は、そのつど運搬のコストがかかるのに対し、仮に一つの土器がB地域へ搬入され、それをB地域内で模倣して製作したならばコストははるかに低い(上野一九八六参照)。

② ラピタ文化複合の消滅のタイミングについて、従来はその瞬間的な同時性が強調されてきたが、実はビスマルク諸島において他の地域よ

引用文献

- 石村 智 二〇〇四 「威信財システムからの脱却」『考古学研究会五十年記念論文集・文化の多様性と比較考古学』二七九—二八八頁。考古学研究会。
- 上野佳也 一九八六 『縄文コミュニケーション——縄文人の情報の流れ——』海鳴社。
- 大賀克彦 二〇〇一 「弥生時代管玉の流通」『考古学雑誌』八六巻四号、一四—二頁。
- クーン、T (安孫子誠也・佐野正博訳) 一九八七 『本質的緊張』みすず書房。
- 坂野 鋭・山田敬嗣 二〇〇二 「怪奇!! 次元の呪い——識別問題、パターン認識、データマイニングの初心者のために——」『情報処理』四三巻、五六一—七、六五八—六三頁。
- 篠達喜彦・荒俣 宏 一九九四 『楽園考古学』平凡社。

り終焉のタイミングがやや遅れることが放射性炭素年代のデータから示されている(Anderson 2001)。この事実は、本論のモデルにのっとって考えるならば、ネットワークは周縁地域から破綻していくためホームランド地域のほうでは比較的長く存続したということを示唆している。

ハンソン、N・R (村上陽一郎訳) 一九八六 『科学的発見のパターン』講談社学術文庫744

ベルウッド、(植木武・服部研二訳) 一九八九 『太平洋——東南アジアとオセアニアの人類史——』法政大学出版局。

モンテリウス、O (浜田耕作訳) 一九三二 『考古学研究法』岡書院。

Anderson, A. 2001. Mobility models of Lapita migration. In G. R. Clark, A. J. Anderson and T. Vunidilo, eds. *The Archaeology of Lapita Dispersal in Oceania*, pp. 15-24. *Terra Australis* 17, Canberra: RSPAS, Australian National University.

Anderson, A. and G. Clark 1999. The age of Lapita settlement in Fiji. *Archaeology in Oceania* 34: 31-39.

Anson, D. 1983. *The Lapita Pottery of the Bismarck Archipelago and its Affinities*. Ph.D. Dissertation. University of Sydney, Australia.

Anson, D. 1990. Aspiring to paradise. In M. Spriggs, ed., *Lapita De-*

- sign, Form and Composition*, pp. 52-8. *Occasional Papers in Prehistory*, No. 19. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Bedford, S., M. Spriggs, M. Wilson, and R. Regenvanu, 1998. The Australian National University-National Museum of Vanuatu archaeology project: A preliminary report on the establishment of cultural sequences and rock art research. *Asian Perspectives* 37: 165-93.
- Bedford, S. and G. Clark. 2001. The rise and rise of the incised and applied relief tradition: A review and reassessment. In G. R. Clark, A. J. Anderson and T. Vunidilo, eds. *The Archaeology of Lapita Dispersal in Oceania*, pp. 61-74. Terra Australis 17, Canberra: RSPAS, Australian National University.
- Best, S. 1984. Lakeba: The Prehistory of a Fijian Island. Ph.D. Dissertation, University of Auckland, New Zealand.
- Best, S. 1987. Long-distance obsidian travel and possible implications for the settlement of Fiji. *Archaeology in Oceania* 22: 31-2.
- Best, S. 2002. *Lapita: A View from the West*. Auckland: New Zealand Archaeological Association.
- Birks, L. 1973. *Archaeological Excavations at Sigatoka Dune Site, Fiji*. Bulletin of the Fiji Museum No. 1. Suva: The Fiji Museum.
- Blust, R. 1980. Early Austronesian social organization. *Current Anthropology* 21: 205-47.
- Burley, D. V., W. R. Dickinson, A. Barton and R. Shuttler Jr. 2001. Lapita on the periphery: New data on old problems in the Kingdom of Tonga. *Archaeology in Oceania* 36: 89-104.
- Butler, V. L. 1988. Lapita fishing strategies: The faunal evidence. In P. V. Kirch and T. L. Hunt, eds. *Archaeology of the Lapita Cultural Complex: A Critical Review*, pp. 99-116. Thomas Burke Memorial Washington State Museum Research Report No. 5. Seattle: The Burke Museum.
- Clark, J. T. and J. Terrell, 1978. Archaeology in Oceania. *Annual Review of Anthropology* 7: 293-319.
- Davidson, J. M., E. Hinds, S. Holdaway, and F. Leach, 1990. The Lapita site of Natunuku, Fiji. *New Zealand Journal of Archaeology* 12: 121-55.
- Dickinson, W. R. 1974. Temper sands in sherds from Mulifanua and comparison with similar tempers at Vaitale and Saso'a (Falete). In R. C. Green and J. Davidson, eds. *Archaeology in Western Samoa, Vol. II*, pp. 179-80. Bulletin of the Auckland Institute and Museum 7. Auckland.
- Dickinson, W. R. 1978. Tempers in Southeast Solomons sherds from Fenu rockshelter on Santa Ana and Lapita sites in the Main Reef and Santa Cruz Group. *Oceanic Prehistory Records* 7: 1-7. Department of Anthropology, University of Auckland.
- Donovan, L. J. 1973a. A Study of the Decorative System of the Lapita Pottery in Reefs and Santa Cruz Islands. M.A. Research Essay, University of Auckland, New Zealand.
- Donovan, L. J. 1973b. Inventory of Design Elements and Motifs in Lapita Reef-Santa Cruz Island Pottery. Eleven Appendices to M.A. Research Essay, University of Auckland, New Zealand.
- Egloff, B. J. 1971. Archaeological research in the Collingwood Bay area of Papua. *Asian Perspectives* 14: 60-4.
- Fullagar, R. and R. Torrence 1991. Obsidian exploitation at

- Umleang, Lou Island. In J. Allen and C. Gosden, eds, *Report of the Lapita Homeland Project*, pp. 113-43. *Occasional Papers in Prehistory* No. 20. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Friedman, J. 1982. Catastrophe and continuity in social evolution. In C. Renfrew, M. J. Rowlands, and B. Segraives, eds, *Theory and Explanation in Archaeology: the Southampton Conference*, pp. 175-96. New York: Academic Press.
- Frimigacci, D. 1975. La Préhistoire Neo-Caledonien. These de 3e Cycle. Université Paris I. Paris.
- Galpaud, J.-C. 1992. Un ou plusieurs peuples potiers en Nouvelle-Calédonie? *Journal de la Société des Océanistes* 95: 185-200.
- Garanger, J. 1971. Incised and applied-relief pottery, its chronology and development in southeastern Melanesia, and extra areal comparisons. In R. C. Green and M. Kelly, eds, *Studies in Oceanic Culture History. Volume 2*, pp. 245-65. Pacific Anthropological Records 11.
- Gifford, E. W. and R. Shutler, Jr. 1956. *Archaeological Excavations in New Caledonia. Anthropological Records* 18: 1-125. Berkeley: University of California Press.
- Gorecki, P., S. Bassett and J. Head. 1991. A Lapita site at Lamau, New Ireland mainland. In J. Allen and C. Gosden, eds, *Report of the Lapita Homeland Project*, pp. 217-21. *Occasional Papers in Prehistory* No. 20. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Green, R. C. 1978. *New Sites with Lapita Pottery and their Implications for an Understanding of the Settlement of the Western Pacific*. Working Papers in Anthropology No. 51. Department of Anthropology, University of Auckland, New Zealand.
- Green, R. C. 1982. Models for the Lapita cultural complex: An evaluation of some proposals. *New Zealand Journal of Archaeology* 4: 7-20.
- Green, R. C. 1990. Lapita design analysis: The Mead System and its use, a potted history. In M. Spriggs, ed., *Lapita Design, Form and Composition*, pp. 33-52. *Occasional Papers in Prehistory*, No. 19. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Green, R. C. 1991a. Near and Remote Oceania: Distinguishing "Melanesia" in culture history. In A. Pawley, ed., *Man and a Half: Essays in Pacific Anthropology and Ethnobiology in Honour of Ralph Bulmer*, pp. 491-502. Auckland: The Polynesian Society.
- Green, R. C. 1991b. A reappraisal of the dating for some Lapita sites in the Reef/Santa Cruz Group of the southeast Solomons. *Journal of the Polynesian Society* 100: 197-208.
- Green, R. C. and D. Anson. 1991. The Reber-Rakival Lapita site on Watom, implications of the 1985 excavations at the SAC and SDI localities. In J. Allen and C. Gosden, eds, *Report of the Lapita Homeland Project*, pp. 170-81. *Occasional Papers in Prehistory* No. 20. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Green, R. C. and P. V. Kirch. 1997. Lapita exchange systems and their Polynesian transformations: Seeking explanatory models. In M. Weisler ed., *Prehistoric Long-Distance Interaction in Oceania: An Interdisciplinary Approach*, pp. 19-37. Auckland: New Zealand Archaeological Association.
- Hunt, T. L. 1980. Towards Fiji's Past: Archaeological Research on

- South-western Viti Levu. M.A. Thesis, University of Auckland, New Zealand.
- Hunt, T. L. 1989. Lapita Ceramic Exchange in the Mussau Islands, Papua New Guinea. Ph.D. Dissertation, University of Washington, Seattle.
- Irwin, G. 1992. *The Prehistoric Exploration and Colonization of the Pacific*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ishimura, T. 2002. In the wake of Lapita: Transformation of Lapita designs and gradual dispersal of the Lapita peoples. *People and Culture in Oceania* 18: 77-97.
- Kay, R. M. A. 1984. Analysis of Archaeological Material from Naigani. M.A. Thesis, University of Auckland, New Zealand.
- Kirch, P. V. 1986. Rethinking East Polynesian prehistory. *Journal of the Polynesian Society* 96: 9-40.
- Kirch, P. V. 1987. Lapita and Oceanic culture origins: Excavations in the Mussau Islands, Bismarck Archipelago, 1985. *Journal of Field Archaeology* 14: 163-80.
- Kirch, P. V. 1988a. The Talepukemalai site and Oceanic prehistory. *National Geographic Research* 4: 328-42.
- Kirch, P. V. 1988b. Long-distance exchange and island colonization: The Lapita case. *Norwegian Archaeological Review* 21: 103-17.
- Kirch, P. V. 1997. *The Lapita Peoples: Ancestors of the Oceanic World*. Oxford: Blackwell.
- Kirch, P. V. 2000. *On the Road of the Winds: An Archaeological History of the Pacific Islands before European Contact*. California: University of California Press.
- Kirch, P. V. ed. 2001. *Lapita and its Transformations in Near Oceania: Archaeological Investigations in the Mussau Islands, Papua New Guinea, 1985-88, Volume I*. Contribution No. 59, Archaeological Research Facility, University of California at Berkeley.
- Kirch, P. V. and D. E. Yen. 1982. *Thakopia: The Prehistory and Ecology of a Polynesian Outlier*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 238: Honolulu.
- Kirch, P. V., M. S. Allen, V. L. Butler, and T. L. Hunt. 1987. Comment: Is there an early Far Western Lapita province? Sample size effects and new evidence from Eloana Island. *Archaeology in Oceania* 22: 123-7.
- Kirch, P. V., T. L. Hunt, M. Weisler, V. Butler, and M. S. Allen. 1991. Mussau Islands prehistory: Results of the 1985-6 excavations. In J. Allen and C. Gosden, eds. *Report of the Lapita Homeland Project*, pp. 144-63. *Occasional Papers in Prehistory* No. 20. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Kirch, P. V. and R. C. Green. 2000. *Hawaii, Ancestral Polynesia: An Essay in Historical Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lepofsky, D. 1988. The environmental context of Lapita settlement locations. In P. V. Kirch and T. L. Hunt, eds. *Archaeology of the Lapita Cultural Complex: A Critical Review*, pp. 33-48. Thomas Burke Memorial Washington State Museum Research Report No. 5. Seattle: The Burke Museum.
- Marshall, Y., A. Crosby, S. Matararaba and S. Wood. 2000. *Sigatoka: The Shifting Sands of Fijian Prehistory*. Oxford: Oxbow Books.
- Meyer, O. 1909. Funde prähistorischer Topferei und Steinmesser auf Vatuom, Bismarck Archipel. *Anthropos* 4: 215-52, 1093-5.

- Mead, S. M. 1975 [1973]. The decorative system of the Lapita potters of Sigatoka, Fiji. In S. M. Mead, L. Birks, H. Birks, and E. Shaw, *The Lapita Pottery Style of Fiji and its Associations*, pp. 19-43. Polynesian Society Memoir No. 38. Wellington. (First appeared in 1973 as supplement to vol. 82 (3) of *Journal of the Polynesian Society*)
- Mead, S. M., L. Birks, H. Birks, and E. Shaw. 1975. *The Lapita Pottery Style of Fiji and its Associations*. Polynesian Society Memoir No. 38. Wellington.
- Parker, V. N. M. 1981. Vessel Forms of the Reef Islands SE-RF-2 Site and their Relationships to Vessel Forms in other Western Lapita Sites of the Reef/Santa Cruz and Island Melanesian Area. M.A. Thesis, University of Auckland, New Zealand.
- Poulsen, J. 1987. *Early Tongan Prehistory*, 2 vols. *Terra Australis* 12. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Prescott, J. R., G. B. Robertson and R. C. Green. 1982. Thermoluminescence dating of Pacific Island pottery: Successes and failures. *Archaeology in Oceania* 17: 142-7.
- Sand, C. 1996. Recent developments in the study of New Caledonia's prehistory. *Archaeology in Oceania* 31: 45-120.
- Sand, C. 1997a. The chronology of Lapita ware in New Caledonia. *Antiquity* 71: 539-47.
- Sand, C. 1997b. *Lapita Collection de Poteries du Site de Foue*. Noumea: Les Cahiers de l'Archéologie en Nouvelle-Calédonie 7.
- Sheppard, P. J. 1996. Hard rock: Archaeological implications of chert sourcing in Near and Remote Oceania. In J. Davidson, G. Irwin, F. Leach, A. Pawley, and D. Brown, eds, *Oceanic Culture History, Essay in Honour of Roger Green*, pp. 99-115. New Zealand Journal of Archaeology Special Publication, Dunedin.
- Sheppard, P. J. and R. C. Green. 1991. Spatial analysis of the Nenumbo (SE-RF-2) Lapita site, Solomon Islands. *Archaeology in Oceania* 26: 89-101.
- Smith, A. 2002. *An Archaeology of West Polynesian Prehistory*. *Terra Australis* 18. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Specht, J. and C. Gosden. 1997. Dating Lapita pottery in the Bismarck Archipelago, Papua New Guinea. *Asian Perspectives* 36: 175-199.
- Spriggs, M. 1990a. Dating Lapita: Another view. In M. Spriggs, ed., *Lapita Design, Form and Composition*, pp. 6-27. *Occasional Papers in Prehistory*, No. 19. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Spriggs, M. 1990b. The changing face of Lapita: Transformation of a design. In M. Spriggs, ed., *Lapita Design, Form and Composition*, pp. 83-122. *Occasional Papers in Prehistory*, No. 19. Canberra: Department of Prehistory, Australian National University.
- Spriggs, M. 1992. What happens to Lapita in Melanesia? In J.-C. Galipaud, ed., *Potterie Lapita et Peuplement, Actes du Colloque LAPIT-74*, pp. 219-30. Noumea. ORSTOM.
- Spriggs, M. 1993. How much the Lapita design system represents the human face? In P. J. C. Dark and R. G. Rose, eds, *Artistic Heritage in a Changing Pacific*, pp. 7-14. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Spriggs, M. 1996. Chronology and colonization in Island Southeast

- Asia and the Pacific: New data and an evaluation. In In J. Davidson, G. Irwin, F. Leach, A. Pawley, and D. Brown, eds, *Oceanic Culture History, Essay in Honour of Roger Green*, pp. 33-50. New Zealand Journal of Archaeology Special Publication. Dunedin.
- Spriggs, M. 1997. *The Island Melanesians*. Oxford: Blackwell.
- Spriggs, M. 2002. They've grown accustomed to Your Face. In S. Bedford, C. Sand and D. Burley, eds, *Fifty Years in the Field: Essays in Honour and Celebration of Richard Shulter Jr's Archaeological Career*, pp. 51-8. Auckland: New Zealand Archaeological Association.
- Summerhayes, G. 2000. *Lapita Interaction. Terra Australis* 15. Canberra: RSPAS, Australian National University.
- Terrell, J. 1989. What Lapita is and what Lapita isn't. *Antiquity* 63: 623-6.
- Tolstoy, P. 1966. Method in long range comparison. *Actas del 36 Congreso de Americanistas (Seville)* 1: 69-89.
- Torrence, R. 1992. What is Lapita about obsidian? A view from the Talasea sources. In J.-C. Galipaud, ed., *Poterie Lapita et Peuplement, Actes du Colloque LAPITA*, pp. 219-30. Noumea: ORSTOM.
- Wahome, E. W. 1997. Continuity and change in Lapita and post-Lapita ceramics: A review of evidence from the Admiralty Islands and New Ireland, Papua New Guinea. *Archaeology in Oceania* 32: 118-23.

Wickler, S. 2001. *The Prehistory of Buka: A Stepping Stone Island in the Northern Solomons. Terra Australis* 16. Canberra: RSPAS, Australian National University.

【謝辞】 本稿は平成十五年度科学技術研究費補助金（日本学術振興会特別研究員奨励費）による成果の一部である。また、平成十二・十五年度科学技術研究費補助金・基盤研究A（一）「ラピタ人からポリネシア人への変容過程を探る先史学的研究」（研究代表者・片山一博、京都大学霊長類研究所（当時）によるトンガ・サモア・フィジーなどの現地調査に参加する機会を得たことが、この世界との出会いであった。さうして、フィールドワークで苦楽を共にした井上智弘氏（京都大学大学院文学研究科）に謝意を表した。

【付記】 脱稿後、以下の文献の存在を阪口英毅氏により御教示頂いた。酒井 中 二〇〇四「ラピタ土器文様の変遷」金沢大学文学部 平成十五年年度修士論文（概要は『金大考古』第四四号一―二頁に掲載）残念ながら現時点で筆者は当文献を入手しておらず、今回の論文に反映させることができなかった。今後別稿に追って言及するのを約束しつつ、お終えた。

（日本学術振興会特別研究員

）

The End of Lapita: A Chronological Assessment of the Changing Forms and Decorative Techniques of Lapita Pottery

by

ISHIMURA Tomo

In this paper I make a chronological assessment of the dispersal of the Lapita cultural complex. A chronology is essential in clarifying the process of the diaspora and disappearance of Lapita. In the first section, I review previous chronological studies of Lapita pottery and take a critical look at the problems therein, arguing for the need of chrono-typological analysis. In the second and third sections, I analyze chronologically the forms of the vessels and the decorative techniques of the pottery, since they have previously been largely overlooked. Finally in the fourth section, I synthesize the results of the previous chapters and the Lapita design analyses in order to present a chronological framework of the Lapita cultural complex. Then I demonstrate the paradox that the very development and spread of the Lapita system led to the breakup of Lapita itself.

Laws Curtailing Town Operating Costs and the Reaction of Towns in Kyoto during the Early-Modern Period

by

PAKU Jinhan

The operating costs of urban districts, or towns, *machinyuyo* 町入用, were borne collectively by the owners of houses in the towns, *iemochi chonin* 家持町人, commensurate with the scale of the property owned. However, with the development of a monetary economy in the later half of the seventeenth century and the expansion of public works within the towns, the operating costs